

第 1 章 ニセコ町地域の概要とニセコ町の環境政策

1.1 ニセコ町地域の概要

1.1.1 ニセコ町の沿革と現在の姿

(1) ニセコ町の歴史

ニセコ町の歴史を物語る年表から主なものを以下に挙げる。

明治 28 年 宇西富から開拓が始まる

明治 34 年 真狩村（現留寿都村）から分村、狩太村と称し、戸長役場を元町に置く

明治 37 年 函樽鉄道（現函館本線）が開通する

明治 39 年 2 級村制が敷かれる

明治 43 年 ニセコ、曾我一帯が倶知安村から合併される

大正 11 年 有島武郎が小作人を集会所に集め、450 町歩の「農場開放宣言」を行う

大正 14 年 桂台の一部を弁辺村（現豊浦町）から合併し、現在の行政区域が定まる

昭和 25 年 羊蹄山が国立公園に指定される（支笏洞爺国立公園）

昭和 38 年 ニセコ山系が、ニセコ・積丹・小樽海岸国定公園に指定される

昭和 39 年 狩太町を「ニセコ町」に町名改称する

平成 13 年 「ニセコ町まちづくり基本条例」施行

平成 13 年 開基 100 年を迎える

(2) ニセコ町の地勢・自然

ニセコ町は、東経 140°48′、北緯 42°52′ 後志支庁管内中央部の羊蹄山（えぞ富士）西麓に位置している。地形は周囲を山岳に囲まれた波状傾斜の丘陵盆地を形成しており、面積 197.13km² で東西に 20km、南北に 19km の広がりを持つ。総面積の 72%、142.03km² が山林原野で、耕地は 15.5%、30.51km² で水田 7.01km²、畑 23.50km² の利用となっている。

気象条件は概して内陸性気候を呈し、温和であるが、東に羊蹄山（1,898m）北にニセコアンヌプリ（1,308m）がそびえ、冬期には積雪が多く、平年で 160cm、多い年には 230cm にも達する豪雪地帯である。また、支笏洞爺国立公園、ニセコ積丹小樽海岸公園の一角をなし、ニセコ連峰を中心に四季を通じて多くの観光客が訪れている。

(3) ニセコ町の社会的・経済的条件

ニセコ町の中央部を東西に横断する一般国道 5 号線を幹線として、道道 66 号線（道道岩内洞爺線）がこれに交差し、尻別川沿いに JR 函館本線が通じている。しかし、JR の特急、急行の廃止や、高速道路網の整備の遅れから、交通条件は決して良いとはいえない。近隣との道路によるアクセスは、倶知安町へ 20 分、小樽市へ 1 時間 30 分、札幌市へ 2 時間、千歳市へも 2 時間程度の距離に位置し、産業・生活・観光など、幹線の交通量は年々増加している。冬期間は積雪のため車両通行が不能となる地域もある。

基幹となる産業は農業で、馬鈴薯を主体とする畑作物、水稻、野菜など栽培作物は多岐にわたり、酪農、養豚などの畜産経営も多くなっている。

経営耕作面積は、一戸当たり平均 11.6ha と中規模になっている。近年は、農家戸数の減少が顕著で、その遊休農地の活用と景観保全などが課題となっている。

この地域は支笏洞爺国立公園 1,447ha、ニセコ積丹小樽海岸公園 1,280ha の公園区域として指定されている。スキー場、ゴルフ場、温泉、ホテル、ペンションなど民間資本などによる大規模な観光開発が進められ、昭和 50 年代頃から急速に発展を遂げている。このため、農業中心の産業構造から農業と観光産業の町として変化している。

(4) ニセコ町の人口動態

昭和 55 年から人口の推移を 5 年ごとの国勢調査人口で比較すると、昭和 55 年から 60 年までの 5 年間では 26 人増加し、増加率は 0.6% でしたが、昭和 60 年から平成 2 年までの 5 年間では 82 人、1.8% とわずかに減少している。平成 2 年から平成 7 年では 130 人、2.9% の増加に転じたが昭和 55 年から現在までほぼ横這いの状況となっている（図 1-1）。

ニセコ町における人口減少は、昭和 30 年代後半からの経済の高度成長などに伴う都市部への人口流出や産業基盤、社会生活基盤整備の遅れなどの全国的な共通要因のほか、不動産業者の土地の買占めなどによる地価の高騰が要因となって、開拓時代に入植した人の離農などが続いたためとみられる。しかしながら、今日の社会経済事情の推移に加え、企業誘致、観光開発が進んだことなどから人口の流出に一定の歯止めがかかり、昭和 55 年からの人口推移で見ると、人口の横這い状態が続いている。

世帯数は、昭和 55 年 1,397 世帯、昭和 60 年 1,529 世帯、平成 2 年 1,583 世帯、平成 7 年 1,744 世帯、平成 12 年 1,766 世帯と推移し、20 年間で 26.4% 増加した。その逆に一世帯当たり世帯員数は昭和 55 年 3.3 人、昭和 60 年 3.0 人、平成 2 年 2.8 人、平成 7 年 2.7 人、平成 12 年 2.6 人と減少し、核家族化が進んでいる。

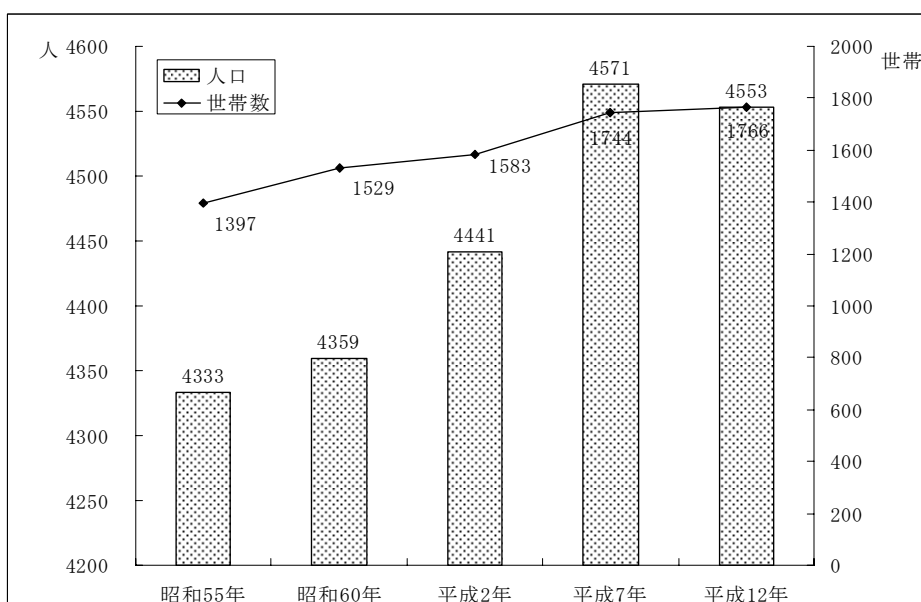


図1-1 ニセコ町の世帯数と人口の傾向

1.1.2 ニセコ町の産業構造と生活環境

(1) ニセコ町の産業構造

総人口に占める就業者の割合は、高齢者人口の増加で、昭和45年54.7%、昭和50年53.6%、昭和55年53.3%と減少傾向にあるが、昭和60年55.8%、平成2年55.4%、平成7年54.3%と回復傾向にある（表1-1）。産業別就業人口は、昭和35年から平成7年までの35年間に就業人口数が33.2%減少している。特に第1次産業就業者は農業就業者を中心に73.7%と著しく減少し、構成比も65.6%から25.8%と減少したのに対し、観光関連産業を主とする第3次産業就業者は増加の傾向にあり、構成比では26.2%から61.2%へと増加した。昭和60年に、第3次産業が第1次産業を上回った。基幹産業である農業と観光との結びつきは弱く、これらの連携を図ることが、地域経済活性化の方向として重要と考えられる。第2次産業就業者数は、昭和35年に310人、構成比8.2%だが、平成7年328人、構成比13.0%と微増となっている（表1-2）。

表1-1 ニセコ町の産業別就業人口の推移

年	第1次産業 (人)	第2次産業 (人)	第3次産業 (人)	計 (人)
1960年(昭和35年)	2,477	310	987	3,774
1965年(昭和40年)	2,101	536	1,027	3,664
1970年(昭和45年)	1,722	392	1,016	3,130
1975年(昭和50年)	1,238	426	1,012	2,676
1980年(昭和55年)	1,025	432	979	2,436
1985年(昭和60年)	961	411	1,193	2,565
1990年(平成2年)	773	373	1,355	2,501
1995年(平成7年)	650	328	1,542	2,520
2000年(平成12年)	565	288	1,509	2,362

表1-2 ニセコ町の農家戸数の推移

年	専業 (件)	第一種兼業 (件)	第二種兼業 (件)	計 (件)
1962年(昭和37年)	530	104	74	708
1970年(昭和45年)	375	140	84	599
1975年(昭和50年)	234	153	75	462
1981年(昭和56年)	184	164	49	397
1985年(昭和60年)	130	180	67	377
1989年(平成1年)	130	151	43	324
1993年(平成5年)	99	147	37	283
1998年(平成10年)	98	91	36	225
2000年(平成12年)	71	97	35	203

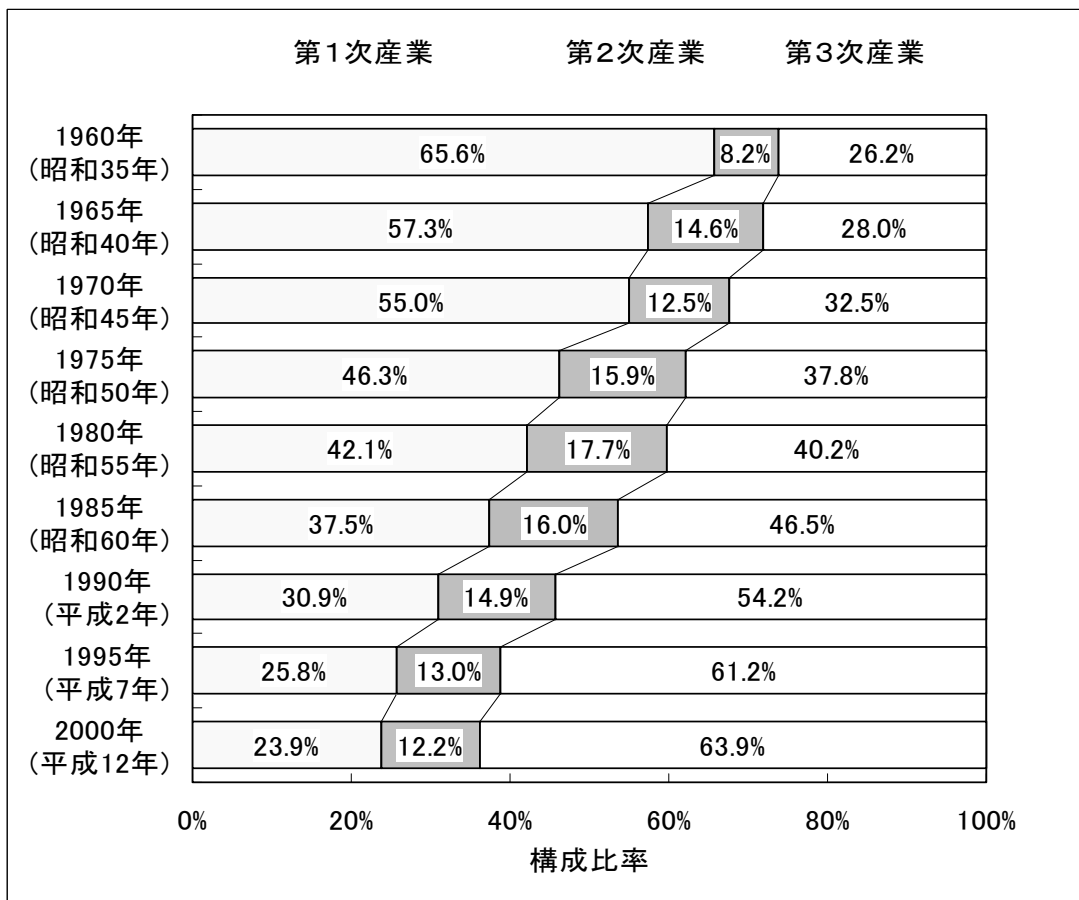


図 1-2 ニセコ町の産業別就業人口の構成

ニセコ町の地域経済産業活動については、次のとおりである。

表 1-3 地域総生産（地域 GDP）でみる産業活動

金額：百万円

	ニセコ町地域	構成比	北海道構成比
産 業			
農 業	1,216	8.9 %	2.3%
林 業	4		0.2
水 産 業	0		0.8
鉱 業	95	0.7	0.2
製 造 業	174	1.3	9.4
建 設 業	1,207	8.8	11.0
電気ガス水道業	164	1.2	2.3
卸売・小売業	540	3.9	13.6
金融・保険業	352	2.6	5.0
不 動 産 業	1,761	12.9	10.6
運 輸 ・ 通 信 業	736	5.4	7.9
サ ー ビ ス 業	5,297	38.6	21.0
小 計	11,545	84.2	84.2
政府サービス生産			
電気ガス水道業	121	0.9	1.3
サ ー ビ ス 業	868	6.3	3.2
公 務	867	6.3	9.4
小 計	1,855	13.5	14.0
対家計民間非営利 サービス生産			
小 計	308	2.3	1.8
地域合計	13,709	100.0	100.0

(平成 13 年のニセコ町広報誌等の数値から推計した表 1-3 を参考)

(2) ニセコ町の生活環境

ニセコ町の生活環境での特徴は、公営住宅の管理戸数比率の高さ(21.8%)にある。その要因は主に大型ホテル等の観光施設従事者の利用によるところが大きい。全国平均の3.8%、全道平均の13%を比べると突出した数値といえる。

また、上水道の普及率(2000年現在:83.3%)を上げることがニセコ町の課題のひとつであるが、既に水道の普及している地区では、観光宿泊施設の多いニセコ町の特性により、水道使用量は非常に多くなっている。

その他の生活環境整備においても、全国・全道平均と比べるとほぼ充足しているといえる。

※ 公営住宅管理戸数比率 = 公営住宅管理戸数 ÷ 町の総戸数

1.2 ニセコ町の環境政策

[方針1：ニセコの環境を守り育てる、新たな生活様式をつくる]

ニセコの豊かな環境と自然が与えてくれる多くの恵みを将来の世代へ伝えるため、これまでの経済性、効率性優先の価値観を見直すことで、新たなライフスタイルを創出し、ニセコの環境を守り育てる。

- ① 資源循環型社会の構築
- ② 住民との協働による環境に優しい取り組みの充実
- ③ 人の生活と環境のバランスを考えた生活基盤の整備

[方針2：快適で安全な住宅・住宅地をつくる]

景観や地域の特性を活かし、多様なニーズに対応したニセコ独自の住まい環境づくりを目指す。

- ① 長く使える公営住宅の形成
- ② 周辺の住環境も向上させる住宅・住宅地整備
- ③ 計画的な除排雪等の実施

[方針3：豊かな自然の中でも、不便さを感じさせない情報環境をつくる]

高度情報化の波が加速度的に進展する中で、都市との情報生活基盤の格差はますます拡大している。この情報格差を少しでも改善していくための努力と、適切な情報発信ができるような仕組みづくりを進める。

- ① 情報を活用しやすい環境の整備
- ② 発信する情報の質の向上

[方針4：人が主役で環境に優しい便利な交通ネットワークをつくる]

ニセコ町の地域特性を踏まえつつ、住む人にとって便利な交通網整備を進めていく。

- ① 歩きたくなる道づくりの促進
- ② 安心快適な総合的交通システムづくり
- ③ 高速交通体系の整備促進

[方針5：自然とふれあえる、身近な水と緑の空間やニセコらしい景観の創出]

ニセコ町の豊かな自然環境は、わたしたちにとって大きな財産である。この自然環境を守りつつ上手に付き合っていくために、総合的な土地利用対策や景観対策を進めていく。

- ① 身近で魅力的な水と緑の形成の促進
- ② 適切な土地利用の促進
- ③ 魅力ある景観形成の推進

1.3 ニセコ町の産業と経済の展望

[方針1：“食・遊・癒”を満喫できる、個性豊かな観光エリアをつくる]

ニセコの持つおいしい農産物、豊かな自然、人、風土といった「資源」を、おもてなしの心を基本に「食・遊・癒」を満喫できる、観光エリアづくりを進める。

- ① 農業等他産業との連携によるニセコ観光の魅力向上
- ② 丁寧な情報提供や交通利便性の向上、魅力的なイベント等による新たな需要喚起
- ③ さまざまな連携によるニセコ観光づくりの推進
- ④ リゾート観光基本計画の樹立

[方針2：地域に密着した、元気のあるニセコ農業をつくる]

他産業との連携や、顔の見える農業として生産者と消費者との信頼関係を大事にする取り組み、農業生産環境の整備などにより、足腰の強い農業を目指していく。

- ① 地元住民や他産業との連携による新たなニセコ農業の展開
- ② 持続的なニセコ農業の推進
- ③ 環境と調和したクリーン農業の展開
- ④ ゆとりと潤いのある農村集落の再生
- ⑤ 農業・農村基盤整備

[方針3：地域内外に人とモノが集まる、活気ある商工業をつくる]

農業と観光の連携を強化し、消費者が集う商店街の形成や優良な地場製品の提供など、魅力ある商工業の振興に努める。

- ① 他分野と連携した魅力あるニセコ製品の創出
- ② 新しい商業環境を生かした交流の場の創出
- ③ ニセコ製品の幅広い提供

○報告書における人口の設定

ニセコ町の将来予測人口は、昭和55年から平成7年までの国勢調査人口と平成12年9月末住民基本台帳人口の変化の傾向から推計を行うと、直線回帰で平成17年には4,583人となり、目標年度である平成23年には4,586人になると推計されるが、出生数の低下による自然減少は顕著に表れている。これまではリゾート関連産業の発展や公営住宅の整備、宅地開発により人口数は均衡がとれていたが、産業構造の変化、少子高齢化の傾向から判断すると、今後の人口数は減少すると推測される。本報告書では、ニセコ町の将来人口（平成23年）を、平成12年とほぼ同等の4,500人、世帯数は2,000世帯（2.25人／世帯）と設定して、エネルギー消費動向を推定する。